

マタイの福音書 7 章です。で、ここを読み始める前に D.M.ロイドジョーンズの『山上の説教』というイエスの『山上の説教』の講解説教集、紛らわしい言い方なんですけれども、そのロイドジョーンズの『山上の説教』という分厚い本ですけれども、そこから少し引用してから、前置きをもう一つお分かちしておきたいと思います。

「ここでもう一度この『山上の説教』の素晴らしさ、人の心を探るその性格、その教えの深さ、実際その驚嘆すべき性格を深く考えさせられる。このような説教はかつて一度もなかった。この説教は私たちすべてを何としてでも、何処にいても探し出す。逃亡の可能性はない。私たちをあらゆる隠れ場から探し出し、神の光のもとに連れ出す。前に何回も見てきたように、新約聖書の中で一番好きなのは『山上の説教』であるなどと、好んで口にする人々の言い方くらい無知で間抜けなものはない。彼らはパウロの神学とその教理に対する強調を好まない。彼らは「山上の説教を与えよ。実際の教え、人が自分で実行できるものを与えよ。」と言う。よろしい、ここにその『山上の説教』がある。『山上の説教』くらい私たちを徹底的に罪に定めるものはない。徹底的に実行不可能な、これ程恐ろしい、これ程教理に満ちたものはない。実際私は次のように言うのをためらわない。すなわち、もし私が信仰のみによる義認の教理を知っていなければ、『山上の説教』を見ようとは決して思わない。なぜなら、この説教は私たち誰もが全く裸で、全然自分の側には望みがなく、その前に立たされるそういう説教だからである。私たちが気軽に取り上げて、実行に移せる実際的な教えであるどころか、この説教は徹頭徹尾もし自分一人でやるようにと言われたら、全然実行不可能な教えから成り立っている。この偉大な説教は教理に満ちており、そして教理に導いていく。これは新約聖書の全教理への一種の序幕である。」

これが『山上の説教』というものです。本来の姿をロイドジョーンズは見事に分析しております。ここを読んで、多く的人是感動するどころか、こんなことがキリストの弟子に要求されているならば、とてもじゃないけれども私はキリストになんかついていけない。信じられないし、クリスチャンにはとてもなれない。あまりにもハードルが高すぎる。あまりにも厳しすぎる、難しすぎると。それこそお手上げ、さじを投げたくなるかもしれません。ギブアップしそうですね。でもそれがむしろポイントであるということも、もう既に前置きとしてお伝えしました。だからこそ私たちには、救い主が必要なんだということです。あなたはダメ人間、全然出来ない、なっていない、徹頭徹尾ですね。イエス・キリストはそのことを私たちにこれでもかと言うほどに訴えかけているわけであります。何のスキも与えません。逃げ道はありません。ロイドジョーンズが言うように、もう逃げられる、逃亡の可能性は全く無い。誰もが神の前には不完全である。誰もが神の前には罪人である。そして誰もが罪人であるがゆえに、罪からの救いを必要としている。自分で自分を救うことは出来ない。自分で自分を変えられない。自分で自分を良く出来ないわけです。弱いまま、情けないまま、不甲斐ないまま、悪い癖を残したまま、どうしようもないひねくれた性格、すぐにカッとしてしまう、すぐにいじめてしまう、一生このままかと思ってしまうところもあります。絶望的に感じてしまうこともあります。でも、イエスはその現実を突きつけた上で、わたしこそが現実の救い主であると。わたしはあなたの現実の姿を知っている。そしてわたしはあなたのその現実の問題に唯一応えることの出来る現実の救い主である。わたしはリアルだとおっしゃってるわけです。ただの宗教の道徳的な良い話をしているのではありません。ただ人の関心を買うような倫理の教科書のような、そういう教えをイエスは説こうとしているのではないわけです。自分が如何に偉大で、如何に優れた教師であるかを、イエスはここで自慢したいのではありません。そのことをもう一度皆さんに確認をして頂いた上で、『山上の説教』の最終区分、7 章から見て参りたいと思います。

『¹さばいてはいけません。さばかれなためです。²あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。』この部分は非常に大切なので、ちょっと時間を取らせて頂きたいと思います。「さばいてはいけません。さばかれなためです。」クリスチャンはよくこの言葉を聞きます。「だから、私のことをさばかないで欲しい。聖書に『さばいてはいけない。』と書いてあるじゃないですか。」と、よく利用されます。まあ、これは間違った利用なので、誤用と言って良いと思います。それは勿論曲解からくる誤解であります。文脈からこの聖句を正しく理解しようとしないので、自分に都合の良いようにこの聖句を利用するわけでありませぬ。「さばいてはいけません。さばかれなためです。」どんな理由、どんな意味においても、とにかくさばいてはいけない、ということをイエスはここでおっしゃってるんでしょうか。“さばく”という言葉はギリシャ語で“クリノー” (krino) と言います。で、同じく『**山上の説教**』の**マタイ 5章 40節**のところにその同じ言葉が使われておりました。『**あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。**』“告訴して”というところに“クリノー”というギリシャ語が使われています。当然“告訴”ということは、法廷に訴えるということです。法的に裁きを求めるということです。ですから、“さばく”と言ってもいろんな意味があると思います。裁きにいろんな幅があると思います。ですから、文脈で判断しなくてははいけません。ここでは、**5章**のところでは、これは「あなたをさばいて下着をとろうとする者には、上着もやりなさい。」というふうには、やっぱり訳せないわけですね。ここでは“告訴”と訳すべきなんです。

で、**マタイ 7:1**の“さばく”とは一体どういう意味で言われているのか。そのことを考えなくてははいけません。また“クリノー”という原語についても、そのニュアンス、その意味の幅とか豊かさも、また性格の意味も皆さんに捉えて頂きたいと思います。私たちは一つの言葉に対して、いろんなイメージを持ちます。自分なりのイメージ、自分なりの理解、自分なりの解釈をしてしまいます。それですと、偏って捉えてしまいますので、バランスをしっかりと持って頂きたいと思います。

で、同じく**マタイ 19:28**、そちらも“クリノー”というギリシャ語が使われていますから、参照して頂きたいと思います。『**そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子が（イエスのことです。）その栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて（十二弟子たちが十二の座について）、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」**』“さばくのです”というところに“クリノー”が使われています。でも、イエスは**マタイ 7:1**で『**さばいてはいけません。さばかれなためです。**』とおっしゃってるじゃないですか。なのに、ここでは同じ弟子たちに「あなたがた弟子たちは将来的には、天に上げられてからはイスラエルの十二部族をさばく。」と。で、勿論これは座についてさばくということですから、法廷でさばくという意味合いで言っています。矛盾してるじゃないですかと思うかもしれませんが、でも、間違いなくここから言われていることは、イエスはどんな意味においても、どんな場合においてもさばいてはいけないんだとおっしゃてるわけじゃないということは明らかです。さばかなければいけないということもあると。誤解してはいけません。ある人たちは、どんな意味においてもさばいてはいけないと、捉え違いしています。でも、同じ『**山上の説教**』の中に、また同じ**マタイの福音書**の中に、この“さばく”という“クリノー”というギリシャ語が使われていて、いろいろな意味にもなりますし、また何が何でもさばいてはいけないとは、イエスはおっしゃっていないということも明らかとされます。

で、今度は同じくイエスの言葉ですけれども、**ルカ 6:37**を見て頂きたいと思います。実はこの**ルカの 6章**は**マタイの『山上の説教』**と似通ってますけれども、実は全く同じ説教ではありません。この説教が語られたロケーション、場所も、時間的なところも全く同じではありません。まあ、似ているということは間違いないですけれども、ただそこで**ルカ 6:37**を見て頂くと『**さばいてはいけません。**（その“さばく”というのは“クリノー”です。）**そうすれば、自分もさばかれませぬ。**（ここは**マタイ 7:1**とほとんど同じ

です。で、その次に) 人を罪に定めてはいけません。そうすれば、自分も罪に定められません。赦しなさい。そうすれば、自分も赦されます。』ここで、さばいてはいけないという言葉に、もう一つの光が与えられました。イエスはどのような意味でさばいてはいけないとおっしゃってるのか、そのさばきと同義語として“罪に定めてはいけない。”と。“さばいてはいけない。”ということは、“人を罪に定めてはいけない”と同義であるということが、ここにイエスによって語られています。“さばいてはいけない”は“クリノー”と言いましたけれども、“罪に定めてはいけない”の“罪に定める”の原語は、“カタディカゾー”(katadikazo)。ですから別の言葉ですけれども、でもこれは同義的に使われています。“さばいてはいけない”というのは、つまり“人を罪に定めてはいけない。断罪してはいけない。”ということです。勿論犯罪を犯せば、法律を犯せば、その法に従って法律の番人がそれをさばくわけです。裁判官がそれをさばくわけです。で、それは当然のことです。但し、主にある兄弟・姉妹の間では、キリストの弟子たちの間では、それはやってはいけないと言っているわけです。何故してはいけないかという、法律は法律によってさばかれるんですけども、それだけが罪じゃないわけです。すべての罪はイエス・キリストが二千年前に十字架で負って下さったわけです。ですから、ある意味でクリスチャンたちは皆そのイエス・キリストの十字架の贖いを我が事として信じています。自分のすべての罪はイエスが身代わりに負ってくださったので、その罪は赦されているんだと。クリスチャンは赦された者たちです。だから罪責感を持つ必要もありません。神様にさばかれるんじゃないかという恐れを抱く必要がないわけです。地獄に堕ちてしまうんじゃないかとか、天国に行けないんじゃないかという恐れはクリスチャンにはないわけです。でも、そのクリスチャンに「あなたは罪人だから、あなたは罪に定められる。あなたは地獄に堕ちる。」そのようにクリスチャンが言うならば、それはイエス・キリストの十字架を否定することになりますし、それは言うてはいけないことなわけです。例えば、私たちは気軽に「あなたはクリスチャンじゃない。」と、クリスチャンに向かっても言ったりもします。クリスチャンとは思えない、という言い方はありますけれども、完全に「クリスチャンじゃない。」というということは、あなたは救われていないということです。本当に信じていないならば、その通りなんですけれども、でも自分が判断して、自分が罪に定めて、この人は到底クリスチャンとして認められないと。それは「さばいてはいけない。」という言葉に抵触するわけです。罪に定めているということをしているわけです。クリスチャンじゃないということは、「あなたは地獄行きだ。」と言っていると等しいからです。でも、本来はイエス・キリストがその罪をすべて負ってくださったので、すべての人、クリスチャン、ノンクリスチャンにかかわらず、地獄に行かなくていいんです。ただそれを信じなければ、地獄行きは免れ^{まぬ}ないわけです。「あなたは赦されてます。もう牢屋から出て良いんですよ。」と言っても、「いや、そんなことは信じません。」といつまでも牢屋にとどまり続けるのも、一つの選びです。信じないという人たち、ノンクリスチャンの人たちは、本当は赦されているのに、本当はもう無罪放免、大手を振ってその牢屋から出られるのに、その刑務所から出られるのに、それがあまりにも美味し過ぎる話、信じ難い話、「そんな都合の良いこと、本当にあるんですか。紐付きじゃないですか。出た途端に何かあるんじゃないんですか。」と恐れたりして、疑ったりして、中々信じないわけです。でも、信じた者は確かに罪が赦され、救われるわけです。天国に入れて頂けるわけです。非常にシンプルで素晴らしい知らせです。それが福音です。でもその福音を信じなければ、自らに裁きを課しているわけです。もう本当はさばかれ^らないと言われているのに、自らさばきのもとにとどまっているわけです。ですから、ヨハネの福音書 3 章には、「信じる者はさばかれ^らないが、信じない者は既にさばかれている。」と書いてあります。

で、話を戻しますとクリスチャンはですからもう裁きの下にはないわけです。にもかかわらず、あなたがクリスチャンを捕まえてさばくならば、罪に定めるならば、それはキリストの十字架の死を愚弄^{ぐろう}する行為です。本来は神がさばくべきところを、あなたが勝手にさばいてるわけです。

そして、ルカ 12 : 57、そこにも“クリノー”というギリシャ語が使われています。『また、なぜ自分から

進んで、何が正しいかを判断しないのですか。』“判断する”というところに“クリノー”が使われています。これも文脈でそのように解することができるわけです。“さばく”というふうにも勿論訳せるわけですが、ただ、“告訴する”とは訳すことは出来ません。判断する、是か非か、正しいか間違っているか。それも“クリノー”のわけです。“クリノー”というのは元々“分ける”という原意がありますので、“白黒分ける”“事の是非を判断する”ということです。

で、それはクリスチャンとしてすべきことです。ありとあらゆる意味で“さばいてはいけない”じゃないんです。判断しなくてはいけない時があるわけです。正しいか、間違っているか。ですから、極論に走って、「イエスは“さばいてはいけない。さばかれないためです。”とされているので、私はありとあらゆる意味で人を裁きません。」とか、人があなたに何か否定的なことを言ってきたら、それだけであなたは**マタイ 7:1**を盾に「あなたは私をさばいている。イエスの言葉に反している。」と言って、あなたをさばくんです。皮肉なことですが、気を付けたいと思います。

また**ヨハネ 7:24**『**うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをしなさい。**』ここにも“クリノー”が使われています。ですから、『さばいてはいけない。』というのは勿論うわべで人をさばくということをしてはいけません。でも正しいさばきならば、むしろそうしなければいけないということです。

同じく**ヨハネ 7:51**『**私たちの律法では、まずその人から直接聞き、その人が何をしているのか知ったうえでなければ、判決を下さないのではないか。**』この“判決を下す”というところにも“クリノー”が使われています。でも、この判決もちゃんと公平な判決でなければならないということです。正しいさばきでなければならないということです。そのためには、ちゃんと当事者から話を聞いて、人のうわさ話だけで判断してはいけない、さばいてはいけない。ちゃんと本人に確かめてから、人の話も勿論聞いた上で、本当にそれが本人の言ったことかどうか、やったことかどうか、ちゃんと確かめた上で正しく判断しなければいけない。正しいさばきをつけなければいけないということです。それもせずに、自分の感情だけとか、または一部の人の偏った意見だけで物事を判断してはいけないと。バランスをとらなくてはならないわけです。右の人、左の人、それぞれの意見を聞かなければいけません。加害者からも、被害者からも、それぞれから聞かなければいけません。現場にいた人、それを目撃した人、証人という人たちからも話を聞かなくてはなりません。

で、**ヨハネ 8:15**『**あなたがたは肉によってさばきます。わたしはだれをもさばきません。**』イエスの言葉です。“肉によってさばく”ということもいけません。*印がついています。欄外には“肉によってさばく”とは、“人間的判断でさばく”。イエスは人間的判断で私たちをさばきませんが、言わば神的判断で私たちをさばくことはなさいます。人間的判断、それは不確かです。人間は不完全だからです。人間はすべてを知っているわけではありません。人間はうわべだけで物事を判断しますが、神は私たちの心をご覧になります。神は私たちのすべてをご存知です。私たちはすべての情報を持っていないのに、勝手に判断します。一部の情報だけで判断するのは、これは人間的さばきということです。それはしてはいけないということです。誰にも分からないということもあるわけです。聖書には「**人の心は他人には分からない。**」と。時に自分の心ですら、自分で分からないこともあります。特に罪人はそうです。十字架上のキリストの言葉を思い出して下さい。「**父よ、彼らをお赦し下さい。彼らは何をしているのか自分で分からないのです。**」罪の中にある者は、自分でも自分のことが時々分からなくなるわけです。それは精神に異常をきたしているという意味ではありません。それもそうですけれども、でもすべての罪人は、自分で自分が何をやっているのか分からないわけです。そんなことで判断しても私たちは間違っただけです。ですから、極端なことを言えば、罪人が言うことやることは、すべて正しくない。その判断も間違っているということです。だから私たちも同じようにさばいてはいけないということです。

で、次に**使徒 4:19**『**ペテロとヨハネは彼らに答えて言った。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従**

うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。』“判断する”というところに“クリノー”が使われています。クリスチャンのコミュニティーの中でも、教会の中でもそうですし、教会の外でもそうです。ここでは特にペテロとヨハネは、自分の上に立つ国家権力に対して、宗教的な・霊的な権威に対して、従うべきか、従うべきでないかということを問われているんですけども、当然第一義的には彼らは上の権威に従わなくてはいけないわけです。でも、例外があります。それは、神の御言葉に反した場合、キリスト信仰に抵触する場合、その場合はたとえ国家権力の言うことでも、たとえそれが上司の言うことでも、親の言うことでも、夫の言うことでも、教会のリーダーが言うことでも、御言葉と照らし合わせて、それが御言葉に沿っていないならば、あなたは神に従うべきだと。それがたとえ法律違反になろうとも。ただ、それは例外中の例外だということも心に留めて頂きたいと思います。

で、次にローマ 2:1~3。これはイエスの言葉と非常に似ています。パウロの言葉です。『¹ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行っているからです。²私たちは、そのようなことを行っている人々に下る神のさばきが正しいことを知っています。³そのようなことをしている人々をさばきながら、自分で同じことをしている人よ。あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとも思っているのですか。』

今度は飛んで、第1コリント 4:5。『ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。』私たちは先走ったさばきをしてしまします。でも、神は光です。ですから、やみの中に隠れていた事、人の目に触れない、誰も知らなかったその真事実、そこにも神はちゃんと光を当てて下さるわけです。神を騙すことはできません。あなたは人にはいくらでも事実を隠して人を騙すことはできます。嘘をつくことはできます。でも、神の前にはそうではないということを知って下さい。

第1コリント 5:3。『私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり、現にそこにいるのと同じように、そのような行いをした者を主イエスの御名によってすでにさばきました。』と語っているのはパウロです。パウロがコリントの教会のある人の罪をここでハッキリとさばいています。でも、断罪してはいけないんじゃないですかと、矛盾してるんじゃないですかと、イエスの言葉と矛盾してるんじゃないですかと、思うかもしれませんが、これは勿論クリスチャンであるならば、どんな罪でもイエスの流されたあの血潮によってきよめられ、赦されます。でも、それでもなお罪を止めずに、悔い改めずに、その罪を続けるならば、赦されているからと言って何をしても良いというわけじゃないわけです。もし、仮にあなたが罪を続けるならば、止めないならば、悔い改めないならば、あなたは事実上イエス・キリストの十字架の死を信じていないということを表明しているわけです。あなたの罪がイエス・キリストをあのような目にあわせたんです。それなのに、あなたは平気でまだ罪を犯し続けようとする。あなたがイエスを殴ったんです。あなたがイエスの顔に唾をかけたんです、つばを吐いたのは。当時のユダヤ人男性にしたらもうこれは最大の侮辱だということです。拳で顔面を殴られることよりも、つばを顔にかけられることの方が、当時のユダヤ人の男性にとってはもう屈辱的なことです。まだ、殴られたほうがマシというくらいの行為です。あなたの罪がイエスを鞭打ったんです。あなたの罪がイエスを裸にして、そして嘲^{あざけ}って、頭にいばらの冠を載せ、そしてその上から葦の棒でボコボコ叩いて、頭蓋骨にまでその棘を食い込ませ、そしてあなたの罪がイエスの背中を鞭打ち、皮膚を裂き、筋肉を裂き、骨が見えるほどに、内臓が飛び出るほどに、半死の状態にしたんです。そのあなたが赦されたんです。無罪という宣告を受けたわけです、無条件に。信じ難いかもしれませんが、神はそんなことを、私たちを赦して下さい。罪のない者をそんな目にあわせて、最終的には十字架の上で釘付けにして殺したわけです。殺人犯です。だ

からあなたのありとあらゆる罪は赦されるんです。私たちの犯した最大の罪は、罪のないイエス・キリストを殺したわけです。それが私たちの犯した罪の一番大きなものです。にもかかわらず、罪を犯し続けるならば、あなたは本当に救われているかどうか、それは疑問だということです。ですから、何度も悔い改めを勧告しながらも、その罪を認めずに、悔い改めることもせずに、さらにおおっぴらに犯し続けるならば、パウロはそういうものをさばくと言っているわけです。私たちもそうしなくてははいけません。クリスチャンだから、この人は赦されて、何をしたって赦されている。その通りです。でも、本当にクリスチャンならば、その罪を心から悔い、心から後悔し、「なんてことをしてしまったのか。また再びイエス・キリストを十字架に磔^{はりつけ}にしてしまうような恐ろしい、おぞましいことをしてしまった。大変申し訳ない。」と。すぐに罪を止めるはずで、勿論しばらくしてからまたほとぼりが冷めたかのように、のどもとすぎて〇〇と言われる通り罪を犯してしまうかもしれません。でも、それでも続けたいとは思わない。後悔してすぐ止めます。それが真のクリスチャンの姿です。完ぺきな人はクリスチャンの中にもおりません。やはり失敗もします。同じ罪を繰り返します。でも本当のクリスチャンならば、その都度心が痛みます。そして、その都度すぐに神様に告白しなければ、そして悔い改めて赦して頂かなければ、これ以上続けられない、これ以上前に進めない、平気ではいられない、ということで必ず罪をそこで処理します。でも、救われていない人は、そのままでも平気です、へっちゃらです。悪びれることもなく、開き直ります。だって私のすべての罪は赦されているし、何をしたってどうせ赦されるんだ、最期にごめんなさいをすれば。そういう人が本当に救われているかどうかは実に疑わしいということです。

で、同じく**第1コリント5:12**。『外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。』外部というのは教会外です。内部というのは教会内です。教会内においてクリスチャン同士、しっかりさばきをつけなければいけないと言っているわけです。罪を教会の中に放置してはいけないと。さばいてはいけないと言いながら、しっかりさばくようにという言葉です。矛盾して聞こえますけれども、しっかり皆さんが意味を理解し、文脈を理解し、そしてこのさばきの意味を正しく知るならば、ちゃんとバランスをもって捉えることが出来るかと思えます。**13節**のところにも『外部の人たちは、神がおさばきになります。(教会外の人たち、不信者の人たち、ノンクリスチャンの人たちは、神がおさばきになりますと。と言っても本来は、イエス・キリストがすべての罪を十字架の上で負っておられるので、その外部の人たちはイエスさえ信じれば神のさばきの対象にはならないわけです。で、) その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。』これは必ずさばけと言っているわけです。いつまでも悔い改めない、悪びれることもなく、平気で罪を犯し続け、そして教会内の多くの人たちにもつまづきを与え、悪影響を与える。そういう人たちは、何度言っても悔い改めないならば、ちゃんとさばいて処罰するよにということなのです。

で、**第1コリント6章1節**から読みます。『¹あなたがたの中には、仲間の者と争いを起こしたとき、それを聖徒たちに訴えないで、あえて、正しくない人たちに訴え出るような人がいるのでしょうか。』“聖徒たち”というのは勿論これはクリスチャンのことです。で、“正しくない人たちに訴える”というのは、言い換えればクリスチャンじゃない人たちです。教会の中でトラブルがあった時に、教会内で処理するよに。でも、正しくない人たちというのは、教会外の人たちで、クリスチャンじゃない人たちのことです。つまり、教会内の問題を法廷に持っていくということです。**2節**に『²あなたがたは、聖徒が世界をさばくようになることを知らないのですか。世界があなただがたによってさばかれるはずなのに、あなたがたは、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。』で、続きにもあります。**3節**以降を読めば分かります。『³私たちは御使いをもさばくべき者だ、ということ、知らないのですか。それならこの世のことは、言うまでもないではありませんか。⁴それなのに、この世のことで争いが起こると、教会のうちでは無視される人々を裁判官に選ぶのですか。⁵私はあなたがたをはずかしめるためにこう言っているのです。いった

い、あなたがたの中には、兄弟の間の争いを仲裁することのできるような賢い者が、ひとりもいないのですか。⁶それで、兄弟は兄弟を告訴し、しかもそれを不信者の前でするのですか。（“告訴”というところに“クリノー”が使われています。）⁷そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。なぜ、むしろ不正をも甘んじて受けないのですか。なぜ、むしろだまされていないのですか。』ですから、教会内のトラブルは教会内でしっかりとさばいて、そして処罰をする。罪の処理は教会内でしっかりと治めるべきだということです。その意味においては、さばかなければいけないんです。放置してはいけないと。いくらイエスが「さばいてはいけません。さばかれないためです。」と言ったところで、その言葉を盾に「私をさばかないでほしい。私が何をしようと私の自由。私はクリスチャンだから何をしたらって赦される。イエスは、さばいてはいけないとおっしゃってるじゃないか。私をさばかないでほしい。」まあ、実際そういう人がいるんです。で、実際そういう人は多いんです。でも、その人たちは完全にイエスの言葉を自分に都合よく捉え、そして誤用しているわけです。乱用しているわけであります。イエスはどんな意味においても、どんな場合においても、さばいてはいけないとおっしゃってるわけではないということです。しつこく話しているんですけども、これだけ私が強調しているということは、この言葉をやたらめったら使う人たちが、やたらめったら多いということを皆さんに是非知っておいて頂きたいと思います。あなたの前にも必ず現れます。マタイ 7:1 を持ってきて、「あなたは私をさばいている。」と必ず言う人がおります。勿論そういう正当なケースもあるでしょう。あなたが確かに間違っ、自分もその人と同じことをして、否その人以上に悪いことをしていながらも、その人のことを断罪してみたりですね。それは確かにイエスのおっしゃってる通り、さばいてはいけないわけです。でも、そうじゃない場合、明らかにその兄弟が罪を犯しているならば、そして罪を認めないで続けるような状況が見受けられるならば、しっかり自己吟味した上で、自分にやましいことがないとちゃんと神様との間でそこをクリアにした上で、あなたは勇気をもってその人にちゃんと伝えなくてははいけません。「あなたは間違っている。あなたはこのままでは神のさばきを受けることになる。」勿論そのさばきは、クリスチャンであるならば、地獄に落とされる、罪に定められるというさばきではありません。でも、パウロの手紙の中にあるように、教会から取り除かれるということもあるわけです。で、それを除名というふうにも言ってます。厳しいさばきです。神学用語では『教会戒規』という言葉があります。あまり使いたくない言葉です。厳しい言葉です。でも、それは聖書に書かれているんです。第1コリント 11:31, 32。『³¹しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。³²しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。』教会内におけるクリスチャン同士の間におけるさばきというのは、これは破壊的なものではないということです。たとえ教会から除名されたとしても、言い換えれば追い出されたとしても、それはあくまで建設目的であって、その人が教会から出て初めて「私はなんということをやってたのか。なんと私は頑なだったのか。なんと私は愚かだったのか。」と気付いて、「やっぱり私は教会に戻りたい。」と。その罪を素直に認めて、そして立ち返るという決心をするならば、悔い改めるならばその人は受け入れられるわけです。事実、コリントの教会ではパウロが除名したその人は、悔い改めたので戻ることが出来たと、この手紙に書いてあります。ですから、切り捨てるという意味ではありません。それは、その人が悔い改めてもう一度やり直す。そして戻ってくるためのさばきであります。でも、放置しておくならば、その人にとっても良くないですし、教会全体にとっても良くないことです。つまづくこともあるでしょう。その人に悪い影響を受けてしまうこともあるでしょう。ですから、その人のことも本当は出来たらさばきたくないと思いながらも、でもその人によってまた多くの人が巻き込まれるならば、その巻き込まれてしまう人のことも私たちはケアしなくてははいけないわけです。その人たちのことも愛さなくてははいけないわけです。

で、今度はヤコブ 4:11, 12 を見て下さい。そこにも“クリノー”が使われています。『¹¹兄弟たち。互

いに悪口を言い合ってははいけません。自分の兄弟の悪口を言い、自分の兄弟をさばく者は、律法の悪口を言い、律法をさばいているのです。あなたが、もし律法をさばくなら、律法を守る者ではなくて、さばく者です。¹² 律法を定め、さばきを行なう方は、ただひとりであり、その方は救うことも滅ぼすこともできます。隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか。』厳しい言葉ですがけれども、それは私たちを守るためのセーフガードでもあります。やたらめったら人をさばいてしまう人、やたらめったら人の粗探しばかりしてる人、その人は大変危険な状態にあるわけです。そういうこともバランスをもって、聖書の一つのフレーズだけとか、文脈から抜き出してその聖句だけを独り歩きさせて自分の都合の良いように指摘解釈する。そしてそれを自分のために乱用する。それはあってはいけないことですし、それは大変な過ちで、自らに大変な害をもたらすものです。

マタイ 7:1 に戻って頂いて、改めて読みたいと思います。今までの話を心に留めて頂きながら。『¹ さばいてはいけません。さばかれたいからです。² あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。³ また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。⁴ 兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。⁵ 偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。』“ちり”と“梁”。建物で考えれば、“梁”は分かりますね。太い柱のような、丸太棒のようなイメージで良いと思います。それに比べて“ちり”というのは、おがくずのようなものです。この“ちり”は“棘”とも訳せます。木の小さな棘と、丸太棒、比較して見て下さい。でも私たちは自分の目の中の丸太棒には気付かずに、他人の目の中のおがくずにばかりに目が留まるわけです。「あなたの目の中のちりを取らせて下さい。」そして人をさばくこと、それが禁じられているわけです。なぜならばあなたの目の中には、遥かに大きいものが入っているからです。ここでは、『山上の説教』の中で、イエスは再三再四、偽善者たちに対して警告を与えています。これはもう今までの文脈の流れを思い出して頂ければ分かると思います。ずっと 6 章のところは特にそうですけれども、人前で善行をしないように気を付けなさい。人前で褒められるために施しをするということは気を付けなさい。それは偽善者のやることである。祈る時も会堂や通りの四つ角に立って、そして自分が如何に霊的なクリスチャンかどうか、それを人々に見せつけるようなパフォーマンスとして祈る。これは偽善者のやる祈りであると。そのように偽善行為をイエスは暴露して、そしてイエスはその偽善という罪を断罪しているわけです。で、ここでは、偽善的にさばいてはいけないということをイエスはおっしゃってるわけです。偽善的でなければ、さばくことが出来るわけです。5 節に書いてあります。『⁵ 偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。』と。要するに自分をちゃんと律して、自分を正して、そして自分がまず神との関係においてやましいところがない健全な者となったならば、あなたはそこで初めて兄弟の目の中のちりを取り除くことができる。兄弟をさばくことができると言って良いわけです。ですから、どんな意味でも、どんな場合においても、さばいてはいけないという意味ではないことは明らかです。偽善という言葉がキーワードです。これは文脈で、偽善的に良い事を行なってはいけないと言っているわけです。ですから、さばくということは、決して悪い事じゃないんです。それは、施しが悪い事じゃないのと同じです。それは、祈りが悪い事じゃないのと同じです。でも、それらすべてを偽善的にするならば、全部悪いことになるわけです。さばきもそうです。偽善的にさばくなら、それはすべて悪い事になるんです。でも、偽善的でないならば、さばくという行為は、決して悪い行為じゃないんです。というのは、もし兄弟の目の中におがくずが入っていたら、痛いんです。可愛そうです、見ている。自分で取れなかったら、誰かに取ってもらって、それで楽になるならば、取ってあげたいですね。さばくということは、そういうことです。害を与えるためじゃないです。逆に、そのちりを取

ってあげる事、それがさばくということです。ですから、自分の生活が正しくされているならば、他人の目のそのちりを取り除くことができます。一切人をさばいてはいけないという人は、人の目の中にちりが入って痛がっているのを見て見ぬふりをするような実に冷酷な人、冷徹な人ということです。ですから、あくまで偽善的さばきをしてはいけないということだけは、ここで禁止されているだけで、むしろ大いにさばくべきです。それは良いことであるということです。誰かに注意される。誰かに間違いを指摘される。それは不適切である。それは罪である。それはクリスチャンとしてふさわしくない。それは神の栄光をあらわしていることでない。それは肉の行為だと。そういうことを指摘されると、ある人たちは「あなたは私をさばいている。」と言います。で、自己弁護しようとしみます。そういう人は「私はさばきません。」と言いますけれども、でも現実には「さばいてはいけない。」とされているのに、「あなたはさばいている。」と言って、その人をあなたがさばいているんです。分かりますか、言っていることが。自分で自分のやっていることが分からないんです。自分で何を言っているのか分からないんです。で、そういうふうは今私が言っているけども、その人は分からないと思います。「あなたは私をさばいている。」と言っている人ほど、人をさばいている人はいないと言っているんです。その人は正にさばいているんです。ですから、結局のところ、その言われた相手の忠告を受付けないわけですから、結局のところ自分が相手の意見をさばいている。「さばいてはいけない。」と言う偽善者には、要注意が必要であります。

マシュー・ヘンリーという有名な聖書講解者はこう言っています。「**他人の過ちに厳しく、自分の過ちには甘いというのは、偽善の印である。**」と。偽善の印、それは自分に甘く、自分のことは大目に見るわけです。でも他人には厳しいわけです。夫が妻のことでなご詰ります。激しく烈火の如く怒ります。又は子供に対して父親が怒ります。でも、よく考えて見て下さい。自分も妻と同じようなことをしていないかどうか。自分も子供と同じようなことをしていないだろうか。で、よくよく考えてみたら、思い当たる節がいくつもあるわけです。なのに、自分には甘いんです。その程度の事は、と言って、うやむやにするわけです。水に流そうとするわけです。ところが人が自分と同じことをすると、やたら目について、やたらムカつくわけです。そして、必要以上に激怒するわけです。高圧的な態度で。他人の過ちに厳しく、自分の過ちに甘いというのは、偽善の印です。そういう人は偽善者です。立派な偽善者であります。自分が出来ていないのに、人をさばく。自分の方が遥かに大きい罪を犯しているにもかかわらず、おがくずどころじゃありません。棘どころじゃありません。丸太棒の罪です。犯しているのに、他人のほんの僅かな小さな罪をやたらめったら指摘して、粗探しして、重箱の隅を突付くようにして、なじる、怒る、糾弾する、そして断罪する。これは偽善的なさばきです。絶対にやってはいけないとイエスが断じているものであります。自分のことを棚に上げて。ある金持ちのところにゲストがやって来て、そのゲストに料理を振る舞わなければいけない。でも、こんな奴にお金を出すのは、自腹を切るのはどうもと思って、その金持ちはその隣にいる貧しい男の可愛がっていた、ペットのように愛していた、その子羊を無理矢理強奪して取り上げて、そしてペットのような羊を殺して自分のゲストに料理として振る舞う。それを聞いたイスラエルのある有名な王様は烈火の如く怒って、「そんな奴は死刑だ。」勿論法律に照らし合わせれば別にその程度のことで死刑になることはありません。単純に子羊をもって賠償すれば良いわけです。でもダビデは烈火の如く怒りました。自分が実は同じ罪を犯していたからです。言うまでもないことですが、ダビデは家臣の妻を子羊のように取り上げて、そしてその彼女と不倫の罪を犯したわけです。このことを預言者ナタンによって告げられた時、ナタンは「その男こそ、あなただ。」と、ダビデに現実を突きつけたわけです。そしてその瞬間ダビデはハッとして、彼は瞬間的にその場所で「私は主に対して罪を犯した。」と、罪を即座に認め、その場で告白し、その場で悔い改めをしました。あなたは他人のちょっとした落ち度、他人のちょっとした罪、それによって烈火の如く怒っていないでしょうか。すぐにカッとしていないでしょうか。それは一つの印です、サインです。あなたはその人以上に大きな罪を犯しているに違いありません。だから、怒る

んです。人をさばく人は、常に自分が正しいと思っています。その態度は自己義認と言います。イエスはこの自己義認を偽善だと言って非難しているわけです。自分を正しいという人たち、自分を間違っていないと言う人たちに限って、やたらめったら人の粗探しをして、そして断罪するわけです。さばくわけです。イエスはその自己義認している人たちをさばかれます。イエスは偽善者を忌み嫌われます。『山上の説教』を通して私たちは皆失格者だということを認めざるを得ません。とてもじゃないけれども、これを一つ一つの言葉に自分についていけない。とても守りきれない。とても従えない。実行不可能なようであると。あなたが正直に素直にへりくだってそのことを認めることが出来るならば、あなたは他の人を見て、出来てない人を見て、さばこうとは思わないと思います。だって、あなたも出来ないんだから。なのに、出来ない人を見てあなたは怒ります。分かりますか、それは自己義認の状態に陥っているということです。それは偽善的なさばきをあなたがやっちゃっているということです。でも、さばかなければいけない時がありますし、さばかなければいけない内容があります。正しくさばくということです。正しい態度で、正しい意味で、正しくさばく。ちゃんと事の是非を、ちゃんと真偽を確かめるようにして判別しなければいけない時があるわけです。識別しなければいけない時があるわけです。見分ける必要がある時、さばきをどうしても白黒ハッキリさせなければいけない時があるわけです。で、罪に定めるという断罪という意味ではなくて、識別・判別・見分けるという意味におけるさばきを私たちは常に日々瞬間瞬間やらなければいけないということも覚えて下さい。それがこの**マタイの 7 章**のイエスの説教の文脈でもあります。**1 節**から**5 節**のところ偽善的なさばき、自己義認に陥っている人のさばきをイエスが非難している一方で、私たちは正しくさばかなければいけない。正しく判断しなければいけない。その真偽を判別する。本物か、偽物か、識別しなければいけない。見分けなければいけない。本当にその人がクリスチャンか、そうでないのか。

6 節を見て下さい。『**聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。それを足で踏みじり、向き直ってあなたがたを引き裂くでしょうから。**』どこかで聞いたことがある言葉だと思います。“豚に真珠”聞いたことがあると思います。これは、ここから取られた言葉です。日本語では“猫に小判”という言葉もあります。それと同じように“豚に真珠”とよく言われますが。豚以外にも犬も使われています。聖書において“犬”とか“豚”というのは残念ながら不浄の動物、きよくない汚れた動物で、ユダヤ人においては食物規定というものがあって、これは旧約聖書の**レビ記**というところに書いてあります。その中で、“豚”というのは食べてはならないものに入ってます。ですから、聖書では汚れを指していて、異教徒のこととか、悪いものを指す時は“豚”とか“犬”という言葉を使ったりもします。で、この後を見て頂くと、“狼”という言葉も使われています。これも“羊の皮をかぶった狼”という言葉 皆さん聞いたことがあると思いますが、その出典元です。**15 節**に『**15 にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは食欲な狼です。**』『**20 あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。**』ぱっと見は羊なんです。でも、その内は狼である。狼も勿論これは聖書では、悪いものの象徴です。特に悪魔・サタンを指します。教会の中に羊の皮をかぶった狼が存在する。彼らを見分けなければ、教会の中で羊たちが食べ物にされてしまうわけです。あなたのまわりには“豚”がいっぱいいます。犬がいっぱいいます。犬と言っても可愛いペットの犬というイメージではなくて、野犬です。死んだ動物の肉を食べるような、また人肉する食らうような野蛮な生き物。それがここで言われている“犬”という存在です。ですから、彼らをちゃんと見分けなければいけない。言い換えれば、正しく判断するためにさばかなければいけないということです。もし、あなたが効果的なミニストリーをしたければ、時間を無駄にせず、労力を無駄にせず、お金を無駄にしないで、神の働きを担っていきたくて心底から願っているならば、あなたはさばかなければいけません。その人が犬か、豚か、羊の皮をかぶった狼かということを見分けなければいけないと、文脈でそう言っているわけです。一つ一つこれは独立した

単独の名言集じゃないんです。全然文脈もない、脈略もない、繋がりもない、バラバラの格言集じゃないんです。確かに有名な格言はいっぱいこの中に散りばめられておりますけれども、全部これは説教の中の一環ですから、説教の中でちゃんとイエスが文脈上言わんとしていることがあるわけです。そのイエスが言わんとしていることに沿って、一つ一つを捉えていく必要があるわけです。福音は正に聖なるものです。福音は正に真珠のような貴いものです。それを犬にくれても、犬はその聖なるものを自分に石を投げられたと勘違いして、却って逆ギレしてあなたに吠えます。「そんなものいらぬ。こんなもの投げつけやがって。」かみつこうとします。折角の真珠のような珠玉の言葉でも、キリストの貴いその珠玉の名言でも、豚に投げても、豚は「こんなもの、食えない。」と言って、踏みにじります。泥の中に転がって、人の貴い真珠を泥まみれにしまいます。もったいないです。無駄なことです。箴言9:7を今度は開いて見て下さい。『あざける者を戒める者は、自分が恥を受け、悪者を責める者は、自分が傷を受ける。あざける者を責めるな。おそらく、彼はあなたを憎むだろう。知恵のある者を責めよ。そうすれば、彼はあなたを愛するだろう。知恵のある者に与えよ。彼はますます知恵を得よう。正しい者を教えよ。彼は理解を深めよう。』ここで“あざける者”とか“悪者”と言われているのが、“犬”です。“豚”です。彼らに聖なるものを与えても、彼らに真珠を与えても、彼らはそれを全く喜びません。意にも介さず、踏みつけるかも、踏みにじるかもしれませぬし、また逆にあなたに牙を剥くかもしれませぬ。で、あなたはそれによって恥を受けます。それによってあなたは傷を受けます。そして、それによってあなたは憎まれます。でも、もしあなたがそのような目に遭ったならば、その人たちは“犬”です。その人たちは“豚”です。私の言葉ではありませんから、これはイエスの言葉ですから。「犬め、豚め。」と口に出さなくてもいいですけども、でも、あなたは必死になって「何としてでもこの人には救われてもらいたいし、私だってこの福音によって救われたんだから、この人だってきっと分かってくれるはずだ。」と、何度も何度もあなたは伝えます。どんなに踏みにじられても、どんなに馬鹿にされても、どんなに罵られて、そしてけなされてもです。時には殴られるようなこともあるかもしれませぬ。「うるさい。」と、「もう二度とそんなイエスの名前を口にするな。」とか、「二度とこの俺に聖書の話をするな。この私に。聞きたくない。」と。「もし、また言うのであれば、絶交だ。」とか、もう会わないだとか、もう聞かない、もう家の敷居はまたがせないだとか、絶交だとか、そういうことをあなたの愛している人たち、あなたが心から救われて欲しいと願っている人たちが、あなたに対してそのように悪態をついてくるかもしれませぬ。そのような激しい抵抗をしてくるかもしれませぬ。もう残念ながら彼らは“犬”であり、“豚”なんです。

ルカ11:45も参照して頂きたいと思います。『すると、ある律法の専門家が、答えて言った。「先生。そのようなことを言われることは、私たちをも侮辱することです。』“先生”と言われたのはイエスです。イエスはこの律法の専門家たちに対して、聖なる言葉をかけたわけです。真珠のような珠の言葉を彼らに与えたんですが、でも彼らはそれを聞いて、却って自分たちが侮辱されてるようだと思ったわけです。「何だ、お前は私を罪人呼ばわりするのか。失敬な。ムカつくんだ。何でそんなことをお前に言われなければいけないのか。偉そうに、何様だと思ってるんだ。」と、侮辱されたと思って彼らは正に“犬”のように嘔みつきます。吠えるわけです。そして“豚”のようにあなたを踏みにじるわけです。

エレミヤ6:10もお読みします。『私はだれに語りかけ、だれをさとして、聞かせようか。見よ。彼らの耳は閉じたままで、聞くこともできない。見よ。主のことばは、彼らにとって、そしりとなる。彼らはそれを喜ばない。』聞く耳を持たない人たちがいます。そして主の言葉も、聖書の言葉も、彼らにとってはそしりとなる。侮辱されたように思う。そして、それを全く喜びません。喜ばしい知らせなのに、福音なのに、でも勿論その福音には罪を指摘する言葉が含まれているわけです。福音は人を救いますけれども、何から人を救うのか。それは罪から人を救うわけです。罪の意識がなければ、人は救われたいとは思わないうわけです。「あなたは救われる必要がありますよ。」と言われても、ピンとこないわけです。「私は別に犯

罪も犯していないし、別に今まで普通に生きてきたし、何の問題もありません。何も救われる必要なんかないです。」でも、その人がもし「あなたは罪人である。」と言われたらどうでしょうか。ムカツとくるかもしれません。ムスツとするかもしれません。でも同時に中にはグサツときながらも、「その通りだな。」と、「私は確かに罪人である。」と。でも、「この罪を自分でどうしたら良いかも分からない。この罪悪感をどう拭いたら良いかも分からない。私は赦されたい。赦される必要を感じている。このままでは不安である。恐ろしい。死んだらどうなるのか。死んだ後、どこに行くのか、分からない。天国に行けるとはとても思えない。私は救われる必要がある。」と。そう思った人はイエス・キリストを信じることができ、そしてそれがその人にとって福音となるわけです。良い知らせとなるわけです。でも、折角の福音でも、「私はそんなことを言われたって、私は十分良い人。あの人と比べれば全然私のほうがマシ。事実私はお前よりマシだ。」と。そういう人は残念ながら福音を信じませんから、折角の福音でも、良い知らせでも、その人にとってはそれは悪い知らせになるわけです。ただ自分の嫌なことを言われたと。ムカツくことを言われ、全然喜べないわけです。怒るしかないわけです。自分のことを悪く言われたとしか、彼らは捉えないわけです。で、もし医者が、あなたの親友の医者が、あなたを診断して、あなたが末期がんであると。それに医者が気付いたとします。でも、現代の最新の治療ならば、まだこの末期がんでも救いようがある。この治療を行えば、今なら間に合う。でも、私がこの友人に「あなたは末期がん。」と言ったらどう思うだろうか。きっとショックを受けるに違いない。きっとパニックになってしまうに違いない。きっと取り乱して、そして「もうそんなことは聞きたくない。そんなことは言うて欲しくない。」と言って、私との友達関係を解消するかもしれない。私を絶交するかもしれない。そんなのは嫌だ。その友達を失いたくない。嫌われたくない。この人にショックを与えたくない。だから黙っておこう。それは偽りの友情であることは明らかです。本当には愛していないことは明らかです。たとえその人が何と思うと、どう感じようと、あなたは医者として義務があるわけです。その人を救えるのはあなただけなんです。あなたは真理を知っています。何をすれば救われるのか、あなたは分かっているはず。なのに、あなたはそれを黙って、嫌われたくないから。伝えなくてははいけません。でも、同時にその人が“犬”であるか、“豚”であるか、あなたは常に判断をしなければいけないということです。もし、“犬”であって“豚”であるならば、何度言っても同じです。その都度あなたは吠えられ、その都度あなたは噛まれ、その都度あなたは踏みにじられます。時間も、労力も、お金も無駄になります。浪費でしかないということです。“犬”でない人たち、“豚”でない人たちは、あなたのまわりに数え切れないほどいるはず。その人たちもイエス・キリストの救いを必要としているんです。なのに、あなたは特定の“犬”や“豚”にこだわって、何としてもこの人に救われて欲しい、分かってもらいたい、福音を受け入れて欲しい、イエスを信じて欲しい。でも、あなたの身近なところでは、“犬”じゃない人たちが、“豚”じゃない人たちが、イエス・キリストを心底から必要としている人たちが、今にも滅びようとしているんです。今にも死ぬ事態になっているわけです。その人たちは待っているんです。「救って欲しい。」と待っているんです。なのに、救われる必要なんかないんだと、そういう人たちがばかりにとらわれて、関わり合って、膨大な時間を使い、膨大な労力を使い、そしてお金までも費やしている。もったいない話です。見分けなくてははいけないと、イエスは言っています。聖なるものを犬に投げてはいけないと、イエスは言っているんです。真珠を豚に投げるなど、イエスは言っているんです。このことを厳粛に受け止めなくてははいけません。

使徒 13 章を開いて下さい。今私がお話したことの実例を皆さんに見て頂きたいと思います。使徒 13:40 から『⁴⁰ですから、預言者に言われているような事が、あなたがたの上に起こらないように気をつけなさい。⁴¹『見よ。あざける者たち。驚け。そして滅びよ。わたしはおまえたちの時代に一つのことをする。それは、おまえたちに、どんなに説明しても、とうてい信じられないほどのことである。』⁴²ふたりが会堂を出るとき、人々は、次の安息日にも同じことについて話してくれるように頼んだ。⁴³会堂の集会在終

わってからも、多くのユダヤ人と神を敬う改宗者たちが、パウロとバルナバについて来たので、ふたりは彼らと話し合っ、いつまでも神の恵みにとどまっているように勧めた。⁴⁴ 次の安息日には（安息日というのは勿論金曜の日没から土曜の日没迄の日です。）、ほとんど町中の人々が、神のことばを聞きに集まって来た。⁴⁵ しかし、この群衆を見たユダヤ人たちは、ねたみに燃え、パウロの話に反対して、口ぎたなくののしった。⁴⁶ そこでパウロとバルナバは、はっきりとこう宣言した。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。（実はこの“決めた”も“クリノー”です。自らをさばいた、ということです。決心したということです。）見なさい。私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます。』このところで止めておきます。で、実際にパウロとバルナバは拒んだ人たちを後にして、ユダヤ人でない異邦人の方へ行きます。48節で『⁴⁸異邦人たちは、それを聞いて喜び、主のみことばを賛美した。そして、永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰にはいった。⁴⁹ こうして、主のみことばは、この地方全体に広まった。』パウロとバルナバはいつまでも頑なで、そしていつまでも口汚く罵るような、妨害ばかりするような、迫害ばかりするような、そういう人たちとの時間を無駄と見て、彼らのもとから去ったわけです。で、むしろ異邦人のほうが救いを必要としていたわけです。だから、パウロとバルナバは彼らの方に行ったわけです。“犬”か、“豚”か、見分けなくてははいけません。

一つだけお伝えしておきたいことがあります。それは、あなたの家族は、（肉の家族のことです。生物学的な家族のことです。血の繋がり、遺伝の繋がり、家の繋がりがある人たちのことです。身内のことです。）彼らはいくらあなたの言うことを拒んでも、いくらあなたが福音を伝えても全然信じようとしない。むしろ“犬”や“豚”のようなリアクションをする。それでも彼らは“犬”じゃないということを知って下さい。“豚”じゃないということを知って下さい。なぜならば、あなたが家族を選んだのではないからです。あなたは自分で選んでこの世に生まれてきたんじゃないです。お父さん、お母さんをあなたは選べなかったはずで。まあ、お父さん、お母さんはあなたを選んだかもしれません。あなたを殺さず、人工中絶せずに、あなたの親はあなたを産んでくれたわけです。まあ、養子というケースもあるでしょうけれども。でも、これは一般論として、私たちは自分で選べない関係もあるわけです。でも、選べる関係もあるわけです。そこにおいて私たちは、“犬”か“豚”かを判断しなくてはいけないということを伝えておきたいと思います。ですから、まずは自分の身内は除外しておいて下さい。それは神があなたをその家庭に送り込んだわけです。で、あなたを先にそこで救ったわけです。勿論だからと言って、あなたの家族は全員あなたのようにイエス・キリストを信じるかどうか、そういう保証はありません。それは私たちには分かりません。救われるかもしれませんし、救われないかもしれません。ただ、聖書の言葉にあるように『主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。』（使徒 16:31) で、実際に家族の誰かが救われたら、家族全体が救われるということは、起こり得ることですし、そういうことは起こりやすいことです。ですから、家族の伝道に対しては諦めないで下さい。イエス・キリストも自分の身内には諦めなかったということを知って下さい。たとえ郷里でイエス・キリストが尊敬されていなくても、結局最終的にはイエスの弟たち・妹たちもイエスを復活後に信じるようになりました。でも、家族以外はどうだったでしょうか。ナザレがイエスの育った地ですけれども、ナザレの人たちはイエスを馬鹿にしました。「なんだ、大工の息子じゃないか。あのヨセフの息子が何をだいたいそれたことを。」と。結局イエスはナザレでは大きな御業をなされなかった。そしてイエスはナザレを後にしたわけです。“犬”と判断したんです。“豚”と判断したんです。イエスはそのような判断を各地ですしています。そしてその都度移動しております。無駄な時間などないと。私たちの今生かされている時間にはリミットがあるということを知って下さい。私たちはいつか死ぬんです。与えられている時間は非常に限られています。ですから、その時間を有効に使わなくてははいけません。その資源を有効に使わなくてははいけません。労力も時間もお金もすべてで

す。無駄遣いをしてはいけないと。だからイエスは判断するように。無駄だと思ったら、すぐ次の人へ、次の町へ。そのように私たちはターゲットを変えなくてはいけないということです。「でも、そういう判断はかなり難しいですね。」と。「どうしたら正しく、間違えずに、“豚”かどうか、“犬”かどうか、判断できるのか。そこがいまいちちょっと分かりません。」文脈がそれを教えてくれます。マタイ7:7を見て下さい。文脈です。ここは皆さんよく知っています。有名な聖句。『7 求めなさい。そうすれば与えられます。

(こういう聖句は皆さん好きですね。素晴らしい約束を伴っています。) 捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。⁸ だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。⁹ あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。¹⁰ また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。¹¹ してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありますでしょう。』あなたもお子さんを持つてれば分かると思います。子供には良いものを与えます。「だから、私は良い父親です。良い母親です」と思ったら大間違いです。イエスはハッキリ言っています。悪い者であっても、自分の子供には良いものを与える。自分の子供に良いものを与えているからと言って、自分が良い人だと思ったら大間違いです。悪い者でも子供には良い物を与えると。

で、ここで、文脈でイエスが教えられていること。どうしたら、その人が“犬”なのか。どうしたら、その人が“豚”なのか、判別できるんですか。識別できるんですか。「求めなさい。」とイエスは言っているわけです。いわゆる目に見える物質を求めなさい、と言っているんじゃないんです。これは文脈上第一義的には、“犬”か“豚”かを判別するために、その答えを知りたければ、わたしに求めなさい。わたしに願いなさい。わたしに祈りなさい、とイエスは教えているんです。で、原文では、“求め続けなさい。”と継続になっています。“捜し続けなさい。”“たたき続けなさい。”求めてもすぐ分からないかもしれません。

“求め続けなさい。”“捜し続けなさい。”“たたき続けなさい。”と。執拗なまでにと言っているんです。で、慎重にという意味でもあります。効果的なミニストリーをしたければ、時間を無駄にせず、有効に使う。労力もお金も。賢く時間を使うためにはどうしたら良いのか。神に祈れということです。でも、なぜ祈り続けなければいけないのか。求め続ける。捜し続ける。たたき続ける。それはまるで神社にお百度参りするような、そういう意味合いで神は私たちに求め続けると言っているのでしょうか。そうじゃありません。そうやって頑張って、一生懸命願わなければ、神様はその願いに応えてくれないと、そうおっしゃってるわけじゃないんです。そうじゃなくて、神は、ここでは御自分のことを“父”と呼ばれています。神は私たちのお父さんです。お父さんは子供と親しい関係を結びたいわけです。父と子の関係の中で言われているということを知って下さい。子供がお父さんに求め続ける。願い続ける。それは何を意味するのか。耳が遠いんじゃないんです。そうじゃなくて、お父さんは子供といつも会話をしたい。いつも繋がっていたい。もっと子供と意味のある、価値のある、quantity も quality も共に密な関係を持ちたいと願っているわけです。用事がある時だけ子供はお願いに来るけれども、あとはもう来ないとか。欲しいものさえ手に入れたら、もう口も利いてくれない。そういう関係を神は私たちと結びたいと思っているんじゃないんです。何度でも来るように。そして父なる神をどこまで信用しているか。信頼関係を築き上げるためです。まあ、子供は、通常ですけれども、良いもの・有益なものを求めて来るものです。だからパンを下さいとか、魚を下さい。御飯を下さいとか、ステーキを下さいとか。まあ、それは食べることが出来るものです。で、もし子供が、あなたの子供が、石を下さいとか、蛇を下さいと言ったらどうでしょうか。まあ、石なんか当然食べられません。石を噛めば、歯が折れてしまいます。蛇なんか与えたら、毒蛇だったら、噛まれて大変なことになります。勿論子供が、石を下さい、蛇を下さい、なんて言ったら、あなたは与えないはずで。なぜならそれは食べれないし、有害だからです。益にならない。無益どころか、有害だという

ことです。「神様は私の祈りに応えて下さらない。何度もお願いしているのに。何回も祈ってるのに。なぜ、私の祈りに応えて下さらないのですか。だから、私は神なんか信じないんです。だって、私の言うことを聞いてくれないから。願い事を叶えてくれないから。」でも、あなたが願っていることは何ですか。ひょっとしたらそれは“石”かもしれないということを知って下さい。ひょっとしたらそれは“蛇”かもしれない。あなたにとって何の益もない、むしろ逆に有害であると。父がそう判断したら、父はもちろん子供が求めても、子供の要請には応じません。何度言われても、もちろん聞きません。「iphone、買って。iphone、買って。iphone、買って。」と言っても、幼稚園の園児にはあげません。ですから、私たちは“石”を求めたり、“蛇”を求めるようであれば、父はそれらを与えないということを知らなくてははいけません。でも、逆に私たちが良いものを、有益なものを、実になるものを求めるならば、父は喜んで与えて下さいます。ですから、ここで私たちは“犬”と“豚”を見分けて、そして私たちはそれを神に求めて、神様があなたにとって、ちゃんと益になること、無益にならないこと、あなたにとって有害にならないこと、ちゃんと教えてくれながら、祈りに応えるか、応えないか、そうしたことで神様はあなたにちゃんと判断をさせて下さいます。自分で勝手に判断しなくても良いんです。祈った結果、この人は“犬”だった。聖書に書かれている通り、この人は“豚”だった。実際に足で踏みにじって、向き直って、そして引き裂くようなことをしてきた。でも、そうされたけれども、祈った結果、私は忍耐してなおもこの人のためにとりなしを続けるように、なおもこの人のために福音を宣べ伝え続けるように神様に示された。であるならば、“犬”のような人でも、“豚”のような人でも、あなたは福音を語り続けなくてはいけないということです。勝手に判断してはいけません。“豚”に見えてもです。“犬”に見えてもです。逆に“犬”には見えない、“豚”には見えなくても、神が「彼は豚だ。」と言え、神が「彼女は豚だ。」と言え、”豚”なんです。

で、12 節。文脈を意識して下さい。『**それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。**』“それで”という言葉が使われています。これも大切な接続詞です。“それゆえ”というふうに訳せます。“それで”“それゆえ”今まで述べてきたことの総括ということです。まとめです。これも大変有名な聖句です。クリスチャンじゃない人も聞いたことがあると思います。『**それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。**』“これが律法であり預言者”という表現は、“これが旧約聖書です。”と。イエスがこれを語っていた時代、新約聖書はまだ完成していませんでしたから、まあ、聖書と言えば旧約聖書しかなかったわけです。ですから、つまりは、“これが聖書全体である。”と。『**何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。**』これが、聖書のメッセージを一言で表せば、こういうことだと。だから、この聖句は昔から『**黄金律**』と呼ばれてきました。英語では”golden rule”と言います。似たような言葉が、偉人たちによって、又は宗教家たちによって、いろいろな聖典にも実は語られております。イエスと同時代のユダヤ教の高名なラビ、ヒルレルという人が度々この福音書の中でも名前を出しておりますけれども、このヒルレルという人、この人の孫がパウロの先生ガマリエルです。ユダヤ教の中では律法の権威です。そのヒルレルという人は、こういう言葉を残しております。「**あなたにとって好ましくないことを、あなたの隣人に対してするな。**」イエスの一時代前の人ですけれども、誰でもこの名前を知っています。ヒルレル。有名な言葉です。「**あなたにとって好ましくないことを、あなたの隣人に対してするな。**」これはイエスの時代に生きている人ならば、誰でも知っていた格言です。高名なラビの教えです。当時のユダヤ教のそれこそ黄金律、ゴールデン・ルールだったわけです。孔子も『**論語**』の中で、こう言っています。「**その欲せざるところ、他に施すなかれ。**」同じことです。ユダヤ教のヒルレルと同じことを言っています。あなた自身の憎むことを、あなたの隣人にしてはならない。そういうことを言っているわけです。ヒンズー教でも、「**人が他人からしてもらいたくないと思う如何なることも、他人にしてはいけない。**」全く同じことを言っています。『**マハ・バーラタ**』というヒンズー教の聖典から引用しました。イス

ラム教ではどうでしょうか。ムハンマドの、マホメットの遺言の中にこうあります。「自分が人から危害を受けたくなければ、誰にも危害を加えないことである。」これも言い回しこそ違えど、全く同じ趣旨のことを言っています。ユダヤ教のヒルレル、孔子、ヒンズー教の聖典『マハ・バーラタ』、そしてイスラム教のムハンマドも、皆それぞれ同じことを異口同音にこの『黄金律』なるものを行っています。但し、それらはすべて消極的です。まあ、否定的と言った方が良いかもしれません。あなた自身の憎むことを、あなたの隣人に対してはしてはいけません。否定です。実に消極的です。でも、イエスの『黄金律』はどうでしょうか。『何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。』“して欲しくないことはするな。”と言っているんじゃないかと、 “して欲しいと思うこと。自分にして欲しい。”ということを積極的に、能動的にしなさいと。ここが違うところ。同じことを言ってるように聞こえますけれども、実のところはぜんぜん違うんです。ヒルレルも、孔子も、ヒンズー教も、またイスラム教も、全部消極的であり、否定的です。まあ、日本人の感覚で言うならば「他所様には迷惑を掛けてはいけません。」人に迷惑さえ掛けなければ、逆に言えば、何をしてもいい、という話です。でも、イエスは違います。そんな消極的、否定的なレベルでとどまりません。イエスは『何事でも、自分にしてもらいたいことを、人にするように。』と。それは実に積極的です。建設的です。能動的であります。それが今までイエスが述べてきたことです。旧約聖書も一言で言えば、この言葉によって要約されると。『さばいてはいけません。』というところだけからじゃありません。今まで、『山上の説教』で述べてきたこと。5章から始まっていることです。いろんな言葉がイエスによって語られましたけれども。いろんな教えがバラエティーに富んだものがあるように思いましたけれども、でもそれら全部をひっくるめて、旧約聖書も全部で39巻からなっていますが、でもそれらすべていろんなテーマを扱ってますけれども、一言で言うならば、この**マタイ7:12**。『何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。』まさにこれこそ『黄金律』ゴールデン・ルールであります。これをやっているならば、あなたはパーフェクトだと言ってるわけです。何の落ち度もない。さばかれることはまず無いです、ということです。で、勿論あなたは“犬”でもないですし、“豚”でもない。神のみこころのど真ん中をあなたは突き進んでいるという証印を受けるでしょう。でも、もしそうしていないならば、あなたは聖書に沿って生活していないということです。「確かに私は人には迷惑を掛けていない。法律なんか犯していないし。何も悪いことはしていない。他所様には指を指されるようなことはしていない。」それであなたは自分が良い人だと思っているかもしれません。問題のない人だと思っているかもしれません。別に救われなくても全然問題ないと思っているかもしれません。でも、もしあなたがこの『黄金律』によって生きていないならば、あなたは非聖書的な生き方をしているわけです。つまり神のみこころから外れている。的を外している。それが聖書では“罪”というわけです。罪は“的を外すこと”と聖書は定義しています。神のみこころという的を外しているあなたは、罪人であり、罪人はさばかれる対象となっております。罪を犯せば必ず罰が伴うわけです。「どうしよう、困ったな。」と。『黄金律』を突きつけられたら、とても私は心穏やかに胸を張って神の前には出られない。天国にはとても行けそうにない。そう思ったならば、あなたには良い知らせがあります。イエス・キリストを信じて下さい。そうすれば、あなたは救われます。で、救われるとどうなるのか。あなたは今まで出来なかったこと、「この『黄金律』なんか、とても自分には無理だ。」と思っていたことが、出来るようになるんです。なぜならばあなたの中にイエス・キリストが住んで下さって、そしてイエスがあなたを通して生きて働いて下さるからです。だからクリスチャンになると、人が変わるとよくいいますね。「この人は変わったなあ。前とは全然違うなあ。一体何がこの人を変えたのだろうか。前はこうだったのに。」勿論それで完璧になるという意味ではありません。だから、完璧でないからこそ、私たちはその都度その都度失敗をしたり、罪を犯せば、神に対して正直にその罪を認めて、告白して、悔い改めることが出来るわけです。そしてもう一度またやり直すことが出来るわけです。『黄金律』に沿って生きていけるように。で、私たちは『黄

金律』に沿って行きたいと、願う者になっているわけです。

で、私たちはイエス・キリストを今信じておりますので、この『黄金律』は私たちには実行可能なものとなっていることを、もう一度覚えて頂きたいと思えます。いろんな点で至らないと、いろいろ細かいことを指摘されると、立つ手がないと思うかもしれませんが、でも、この『黄金律』、シンプルですね。今自分にしてもらいたいことを、誰かにしてあげるならば、あなたは律法を全うしていることになります。みことばに従って生きていることになります。今日あなたはそれを実行したでしょうか。それともあなたは、「自分にしてもらいたくないことは、人にもしないでおこう。迷惑を今日は掛けなかった。誰にも文句を言われることはしなかった。」それで満足しているようであるならば、あなたは救われていないのかもしれませんが。それで満足しているようであるならば、それは、自己義認ということです。それは、偽善ということです。

で、最後に 13 節と 14 節。『¹³狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多いのです。¹⁴いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。』と。これもどこかで聞いたことがあると思えます。“狭き門”と言えば“東大”と思うかもしれません。どっかの有名校、難関とされるところ、入学するのが非常に難しい倍率の高いところ、そういうところがよく“狭き門”なんて言われます。でも、それは全然違う意味です。この“狭い門”は“いのちに至る門”だと言われています。逆に“滅びに至る門”は狭くなくて、広いと。「広いほうが良いじゃないですか。狭いのは嫌です。」と思うかもしれませんが。でも、“いのちに至る門”は狭いと。私は狭いことをとても感謝しています。広いほうが大勢の人が受け入れられているようで、良いように思うかもしれませんが、その“広い”というのは『沢山の道がある。いろんな方法がある。』というニュアンスで語られています。でも“狭い門”は『たった一つの方法しかない。一本道しかない。』というようなものです。で、私のような単純な者にとっては、一本道しかない方が良いです。あれもこれも奔走して、研究して、探し回って、「どれが本当なのか。本当にこれで天国に行けるのか。本当にこれで救われるのか。」いろんなものを試して、いろんなものを経験して、いろんなものを勉強して、「ああでもない、こおでもない。」膨大な時間をかけ、恐らく世界中のすべての宗教なり、すべての哲学なり、すべての思想なり、すべての教え。それを研究し尽くせることはまずないと思えます。どんなに長生きしてもです。それで見つけれなかったらどうでしょうか。結局は死んで終わるだけです。そして、言い知れぬ不安を、虚しさの中で、後悔しながら、最期惨めに終わるだけであります。でも、ここで良い知らせがあります。いのちに至る門は狭い門である。一本道である。迷う必要がない。ただその狭い門を通ればそれで良いんだと。

イエス・キリストはヨハネの福音書 14:6 でこう言われました。イエスの言葉です。『わたしが道である。(一本道である。) わたしが真理である。(他には真理はない。そして、) わたしがいのちである。(と。他にはいのちがない。言い換えれば、救いはない。そして、) わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。(言い換えれば、誰一人イエスを通さなければ天国には行けない。いのちには至らないと。いのちに至る門こそ、イエスです。)]

イエスは他にもヨハネの福音書 10 章では、「わたしは門です。わたしは羊の門です。」ともおっしゃっています。いくつも門があるんじゃないんです。いろんな宗教があって、いろんな宗教の開祖があって、いろんな宗教の指導者があって、いろんな教えがあって、ゴールデン・ルールがいくつもあって、というんじゃないんです。イエスのゴールデン・ルールはたった 1 つです。他は全部似たり寄ったりですけれども、全然違います。イエスのような教えをしている人はいっぱいいます。お釈迦さんにしても、いろんな宗教の教祖たちも、似たようなことを言います。「浄土真宗の親鸞なんか、それこそ信じるだけで救われると、全くイエスと同じようなことを言っているじゃないですか。新約的じゃないですか。」と。確かに似たようなことを言っています。でも、救い主はたった一人なんです。

使徒 4 : 12 も読みたいと思います。『この方以外には（この方とはイエス・キリストです。）、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。』イエス・キリスト以外に救いはありません。イエスこそ“狭き門”です。「でも、受験勉強しないと入れないじゃないですか。」全くそんな必要はありません。誰でもイエスを信じることは出来ます。子供でもです。年寄りでもです。他にも第 1 テモテ 2 : 5 には『神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。』神は唯一、ただお一人です。イエス・キリストはここでは“神と人との仲介者”と呼ばれています。でも、イエスも神なんです。「そこが分からないんですよ。神が一人なのに、どうしてイエスも神なのか。それでは二人じゃないですか。」否でも実は聖書には、聖霊も神だと言われています。「じゃあ、神は三人いるんですか。でも、神は唯一だと。一体何ですか、これは。矛盾しているじゃないですか。おかしいじゃないですか。」 $1 + 1 + 1$ は、確かに 3 です。でも $1 \times 1 \times 1$ は、3 じゃありません。1 です。勿論こんな単純な数式で、三位一体の神を説明するということはできません。でも、聖書には度々父なる神も“神”。子なる神イエス・キリストも“神”。ただこのイエス・キリストは非常にユニークな方で、神であるにもかかわらず、人と同じ姿をとって、クリスマスに生まれてくださった。「父が神で、子供が神。よく分かりません。」と思うかもしれませんが、でも親子の関係も同じです。父と子、確かに別格の人格は持っています。でも、親子なんです。同じ血を分けたものです。同じ存在です。同じ権威を持っています。あなたが死んだら、間違いなく、あなたの子供があなたの持っているものを全部受け継ぐわけです。で、そしてあなたと同じ立場になるわけです。父と子にはそんな大きな違いはないと思って下さい。まあ、確かに三位一体の神の概念を、私たちのちっぽけな理性で、頭の脳ミソで、全部調和させようとしても、それは無理があります。でも、もし頭の中で三位一体の神を私は理解したという人があるならば、その人は多分どこかの精神病院に入ることになると思います。勿論それは不可能ということですが。私たちの頭で理解できてしまう神なんて、ちっぽけ過ぎると言っているわけです。ですから、敢えて神は私たちには、理解できないような、ミステリアスな存在であるということは、明らかにされていますけれども、そのミステリアスな存在であっても、神はご自身のことを私たちに知らせたい。分かりやすい存在となりたい。だから、人間と同じ形をとって、わざわざ来てくださったわけです。素晴らしいことです。たとえば私たちが小さな蟻の群れを眼下に見下ろしたとします。で、あなたが目をやると、向こうから鉄砲水がやって来ます。このままでは蟻の群れは全部この鉄砲水によって押し流されて、全部溺死してしまう。全部滅びてしまう。かわいそうだな。向こうから鉄砲水がやってくるのは、私には見えるけれども、蟻たちには分からない。彼らには何の危機的感覚もない。普段と同じようにチョコマカやっている。でも、私は蟻をこよなく愛しているから、蟻にはどうしても救われて欲しい。大声で叫びます。「蟻たちよ。このままではお前たちは滅びてしまう。」と。でも蟻たちは何の意も介さず、いつもと同じように生活をしています。何かうるさい変な人、変な生き物が何かやっているな。」と主は思いません。「困ったな。蟻は全然分からない。」じゃあ、蟻に分かる言葉で語ろう。蟻語で語るとします。でも、もしあなたが蟻語で人間として語ったらどうでしょうか。蟻の方はもっとビックリします。化物だと思ってしまう。これではダメだ。逆効果だ。じゃあ、どうしたら良いか。答えは 1 つです。解決は 1 つです。それはあなたが蟻と全く同じちっぽけな存在となってそして、蟻と同じ言葉を語って、そして蟻たちにその危機感をちゃんと蟻たちの分かる言葉で伝え、そして、どうやって蟻たちは救われのか、ということを説明してあげることです。そして、蟻たちにとって、蟻たちを救うことの出来る本当の神とはどういう方か。父なる神とはどういうお方か。そのちっぽけになっているその存在のイエス・キリストが私たちに伝えてくれたわけです。イエスは蟻どころか、蟻以下の存在となったわけです。人間からして蟻というレベルじゃないんです。神からして人間。人間は塵です。全宇宙を造られた、その無限の存在が人間の姿をとるなんて本当は有り得ないことです。まだ蟻なら可愛い方です。まだ

蟻の方が抵抗が少ないかもしれません。神が人間になるよりはです。聖なる神が肉なるものになるよりは、まだ、ましかもしれません。まだ、うじ虫になる方がもしかしたら楽かもしれません。神が人間になるよりは。でも、そんなことを神はして下さったんです。そんなことをして下さった神は他にはありません。そんな救い主は他を見回しても、どの世界の宗教の中にも見出すことは出来ません。どんな偉人の中にも見い出せません。しかもこの人となられた神は、罪を犯さずに、そしてすべての人間の罪を十字架に負って代わりに死んで下さった。代わりに罪を被って死んだような救い主は他にはいませんし、しかもその救い主は死から三日目に甦ったという、死に打ち勝ったそんな人間は歴史上他には一人もおりません。「そんな馬鹿な、そんな荒唐無稽な話は信じられない。」とあなたは言うかもしれません。でも、実際にイエスが甦ってから二千年経ちましたが、二千年経っても未だイエスの復活を否定できた者は一人もおりません。これは歴史的な事実であります。荒唐無稽だと言う人も、実際につぶさにイエスの復活の事実を調べて見たところが、逆にミイラ取りがミイラになって、「やっぱりイエスは本当に甦られた。」甦られたということは、イエスはただの人間ではなかった。イエスは人となられた神であったと。本物の現人神であったという結論に至って、そしてイエスを自分の救い主、人生の主と信じるに至る。そして、人生が大きく変えられる。そういう人たちがゴマンといるわけです。数え切れないほど世界中にはいるんです。イエスしか私たちが救うことの出来る神はいません。イエスこそが“狭き門”です。イエスこそが唯一のちに至る門です。ただ一人の救い主。私たちはその方を今信じるようにされたわけです。かつては私たちも“豚”でした。“犬”と呼ばれるに相応しい者です。でも、私たちは救われたんです、無条件で。ですから私たちは、この素晴らしい救いの知らせを伝えずにはられないんです。こんな私も救われたんだから、あのひとだってきっと救われるに違いない。きっと分かってくれるに違いない。押し付けるという意味ではありません。伝えなければいけないと思っています。使命感からです。救える方を知っているからです。今にも滅びようとしている人たちを私たちは目の当たりにしているからです。このままでは彼らは死んでしまう。このままでは彼らは永遠に浮かばれない。本当に救われて欲しいから、だから伝えなければいけないし、伝えたいんです。誰からも強要されていません。やらなければいけないとも言われません。クリスチャンだから、やれと言われたわけじゃないです。この救いを体験してしまったので、この救い主を知ってしまったので。わたしだけじゃない、他のすべての人も、イエスによって救われるということを信じているので、私たちはイエスを伝えようとするわけです。まあ、今日はここで終わりたいと思います。『山上の垂訓』は、まだ続くわけです。7章迄でありますけれども、5章から7章が『山上の説教・山上の垂訓』と呼ばれているところですが、是非文脈を忘れないように。復習が大事です。ですから、次回は休みになりますけれども、忘れないように、今日聞いたこと、ノートに取ったこと、それをもう一度家に帰っても、一週間かけても、じっくり咀嚼して、反芻して、そして何度も何度も読み直し、何度も何度も聞き返して欲しいと思います。そうすると、また次回『山上の垂訓』の残りのところ。多分次回で最終回になると思います。でも、そこでまた文脈を思い起こして、すぐに繋げていけると思います。勿論忘れてしまっても私は皆さんの反応を見て、忘れていたようだったらまたもう一度同じことを繰り返して言いますから。そうすると長くなるだけですけれども。皆さん次第です、長くなるか、短くなるかは。人のせいにしてますけれども。でも、前の内容を私たちは、連続講解説教ですから、繋げていかなければいけない。この流れを無視してはいけないということなので、忘れていたようであれば、そのことも皆さんで是非自分を助けるという意味で、復習をして頂きたいと思います。予習をする必要はあまりありません。してきていただいて全然構わないですけれども、予習よりも大事なのは復習です。そして、私たちはすぐに忘れるものです。ですから是非復習をしっかりと、自分のものにして頂きたいと思います。